

『王太子のための古典ラテン文集』に見る プラウトゥスとテレンティウスの価値¹

La valeur de Plaute et Térence dans la collection *Ad usum Delphini*

榎本 恵子
(大妻女子大学)

序論

『王太子のための古典ラテン文集』La Collection *Ad usum Delphini*は、ルイ14世の息子グラン・ドーファンLouis de France, dit le Grand Dauphin (1661-1711) のために養育係モンソージエ侯爵duc de Montausier (1610-1690) と副家庭教師ピエール＝ダニエル・ユエPierre-Daniel Huet (1630-1721) によって企画されたコレクションである。コレクションには1674年から1730年の55年間に41の著作が収められた。

このコレクションの価値を再評価したC.ヴォルピラック＝オジェは、コレクションの作家リストにクインティリアヌス、セネカ、ルカヌスなどが選ばれず、17世紀の教育機関においてその内容がふさわしくないとして外されることの多いプラウトゥスとテレンティウスが含まれていることを疑問視している。そしてこのプロジェクト始動初期にこの2人の作品が編集されたことを不可解に感じている²。H.ドゥリュオンは、生徒の教育に心を砕かなければならない家庭教師であり、演劇を厳しく糾弾しているボシュエJacques-Bénigne Bossuet (1627-1704) がグラン・ドーファンにテレンティウスを読ませたことに驚いている³。P. モルミッシュも、これらを受けてグラン・ドーファンがテレンティウスを読むのはモリエールの作品を理

¹ 本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2813) の助成を受けたものである。

² *La collection Ad usum Delphini, L'Antiquité au miroir du Grand Siècle*, sous la dir. de Catherine Volpilhac-Auger, ellug, 2000, p. 40, p. 70-71 et sq.

解するためではないかと、半ば疑問形式で言及している⁴。

これほど選ばれることが不自然であると思われるブラウトゥスとテレンティウスの作品を取めた『王太子のための古典ラテン文集』とはいかなるものか。王太子グラン・ドーファンの教育において何故このプロジェクトが成立し得たのか、王太子の教育とそれに影響を及ぼした時代背景、教育環境から検証していく。そして、この二人の古典ラテン喜劇作家ブラウトゥスとテレンティウスが文学や文芸の華開いた17世紀フランスの知識層に大きな影響を持っていることを再確認していきたい。

I. 『王太子のための古典ラテン文集』プロジェクトと王太子の教育

1. 『王太子のための古典ラテン文集』とは

モントーリエ侯爵はルイ14世の息子グラン・ドーファンの養育係に任命された1668年から、韻文、散文を問わず古典ラテン作家の著作集を作りたいと考えていた⁵。そして副家庭教師ピエール＝ダニエル・ユエと企画したコレクションに以下の古典ラテン作家41の著作を取めた⁶。

1674年：フロリュス；サルスティウス

1675年：テレンティウス；ウィルギリウス；コルネリウス・ネポス；フェードル；
ウェッレイウス・パテルクルス

1676年：歴代ローマ皇帝の演説集

³ ボシュエとともにグラン・ドーファンが読んだのは、ボシュエ自身テレンティウスの中で「最も過激なもの」とであると認めている『宦官』である。Bossuet, *Correspondance II (1677-1683)*, coll. « Les grands Écrivains de la France », éd. Ch. Urbain et E. Levesque, Paris, Librairie Hachette et Cie., 1909, note 1 p. 108. H.ドゥリュオンの驚愕は以下を参照：H. Druon, *Histoire de l'éducation des princes dans la maison des Bourbons de France. Tome premier. Henri IV, Louis XIII, Gaston d'Orléans, Louis XIV, Philippe d'Orléans (Monsieur), Le Grand Dauphin*, Paris, P. Lethielleux, libraire-éditeur, 1897, p. 262-263.

⁴ Pascale Mormiche, *Devenir prince, L'école du pouvoir en France, XVII^e-XVIII^e siècles*, CNRS éditions, [2013], 2015, p. 303.

⁵ Pierre-Daniel Huet, *Mémoires (De rebus ad cum pertinentibus commentaries, 1718)*, introduction et notes par Philippe-Joseph Salazar, 1993 (supplément de la revue *Littératures classiques*, diffusion Klincksieck) ; traduction de Nisard, 1858, revue par Ph. -J. Salazar (cité ci-après *Mémoires*), p. 137-138. Cité par C. Volpilhac-Augier, *op. cit.*, p. 31-32.

- 1677年：ユニアヌス・ユスティヌス；クラウディウス
1678年：クイントゥス・クルティウス・ルフュス；カエサル
1679年：ブラウトゥス；マルクス・マニリウス；ヴァレリウス・マキシムス
1680年：ポエティウス；ルクレティウス；マルティアリス；ディクティとダレス
1681年：アウルス・ゲッリウス；フェストゥス；アウレリウス・ヴィクター
1682年：ティトゥス・リウィウス；タキトゥス
1683年：エウトロピウス
1684年：スエトニウス；キケロ（『弁論家について』）；ユウェナリス、ペルシウス（この2人は伝統的にいつもセットで取り上げられる）
1685年：プリニウス；スタティウス；カトゥルス、ティブルス、プロペルティウス（この3人は伝統的にいつもセットで取り上げられる）；キケロ（私的書簡）
1687年：ブリュデンティウス；キケロ（弁証論関連の書）
1688年：アプレイウス
1689年：キケロ（哲学関連の書）；オウィディウス
1691年：ホラティウス
1699年：ウィルギリウス改訂版
1723年：プリニウス改訂版
1730年：アウソニウス

それぞれの著作はテキスト、解釈、注釈、索引から成り立っており、すべてラテン語で編集された。解釈はそれぞれの専門家が担当した。テキストはラテン語の原典のみで、原文のラテン語が難しい場合には平易なラテン語が補われた。例えば、ウィルギリウスのように、詩が韻文で書かれている場合、原文の下に易しく言い換えたラテン語の散文が付けられ、読者の理解を助ける配慮が施された。読者（王太

⁶ 本論 p. 400-402、参考資料参照。古典ラテン作家は1) Avant Auguste ローマ帝国の初代皇帝アウグストゥス以前（紀元前27年以前）、2) Avènement d'Auguste 皇帝アウグストゥスの時代（紀元前27年-紀元前14年）、3) Siècle des Antonins ネルウァ=アントゥス朝の時代（帝政中期96年-192年）、4) Début du IV^e siècle 4世紀初頭の4つの時代から選ばれている。

子)の道徳・倫理教育や、心を乱さないような配慮から、原典のテキストからは不穏当箇所が削除された。それでも、成長した王太子が全文を知ることができるように、削除した部分を巻の最後に載せた。注釈は「明解で易しく」ということが重視された。熟語などの難しい言葉の説明の他に、作品執筆時の歴史、神話についての解説など読者の作品理解を助けるための注釈が付けられた⁷。

このプロジェクトが構想され実現に至った理由は大きく分けて次の要因が考えられる。当時の時代背景および時代のニーズと教育環境の二つの弊害である。まず、王太子の教育に影響を及ぼした時代背景とこのプロジェクトを後押しした時代の求めるニーズを見ていきたい。

2. プロジェクト実現のための第一要素：ルイ14世の教育

教育係は、古代からその伝統が続く「家庭教師」*« précepteur »*と呼ばれていたが、時代の流れの中でその呼び名は「養育係」*« gouverneur »*となった。16世紀、この二つの用語が混同され、ヴァロワ朝の時に異なる二つの役職となった⁸。王太子は「養育係」と「家庭教師」のもとで学ぶことになる。ルイ14世以降、それぞれに副養育係、副家庭教師がついた。

国の政治や活性化は王子たちの教育如何で決まる。国家を治める者としての覚悟や役割、つまり、軍事面と国王としてあるべき素養、社会道徳を養育するのが「養育係」の仕事である。養育係は同時に国王のボディガードを務め、成人に達するまで傍に就く。国王に任命され、家族同然の権利を持つことが許される。幼少期から成人するまでを面倒みることから、成人後も近しい関係にあり、王子が結婚するときにはその第一側近となる。単なる保護、道徳的・政治的養成だけでなく、王子の家の財政にまで責任を持つことにもなる⁹。従って、忠実な家系を選ばなければならぬし、そこには政治的な駆け引きも生じる¹⁰。

一方、「家庭教師」は古来あるイメージ通り、学問、特に文学的側面を受け持つ。子供の精神的側面の成長において、風習、慣用、的確な判断力が身に着くよう教育

⁷ C. Volpilhac-Augier, *op. cit.*, p. 22, 37.

⁸ *Ibid.*, p. 15.

⁹ *Ibid.*, p. 19-21.

する。「教会の長女」¹¹であるフランスにとっては国のトップである国王の宗教教育も等閑にはできず、その時々、国の立場によって時に聖職者、時に非聖職者が選ばれた¹²。

教育期間には流動性があり正確に決まっていない。幼少のころ女性の手で育てられた後、7歳になると養育係について勉強が始まる。二期に分かれていて、7歳から13歳までの第一期は、規則正しく、しっかりとした教育を受ける。そして16歳ぐらいまで続く第二期は、公務などと並行して行われたため、純粋な勉強時間は少なくなる。そしてその間は通常合わせて10年くらいである¹³。

ルイ14世は1638年9月5日に誕生し、ルイ13世の崩御とともに5歳で即位した。1643年7歳の時に教育が始まったと想定できるものの、正確な記録は残されていない。ルイ14世が誕生した時から養育係の候補は何人もいた。しかしルイ13世、王妃アンヌ・ドートリッシュ、リシュリユー、マザランそれぞれの異なる思惑に、なかなか決まらなかったのである。王妃の希望に反して、リシュリユーは、ラ・モット・ル・ヴァイエを押ししていたが、実現させる前に1642年死去した。ルイ13世も息子に洗礼を受けさせた後、教育係と家庭教師を決めるはずであったが、1643年5月に崩御、結局何も決まらないままになってしまった。そして本来ならばラ・モット・ル・ヴァイエが家庭教師になるはずであったが、アンヌ・ドートリッシュの反対にあっ

¹⁰ アンリ4世の幼少期はちょうどヴァロワ朝からブルボン朝への過渡期であったため、ルイ13世にジル・スーヴレというブルボン朝に忠実で、教皇の覚えのめでたい人物を付けた。ルイ14世にはニコラ・ド・ヴィルロワ、ルイ15世にはフランソワ・ド・ヴィルロワと同じ家系から選出された。P. Mormiche, *op.cit.*, p. 37, sq.

¹¹ フランスが「教会の長女」であることは、1980年教皇ヨハネ・パウロ2世の言葉として有名であるが、言葉の起源は19世紀である。フランク国王クロヴィスの戴冠に遡り、以降、フランスの国王の戴冠がランスで教皇の「聖別」を受けることに由来する。

¹² ルイ13世の家庭教師には非聖職者セザール・ド・ヴァンドーム、ルイ14世には聖職者ペレフィックス、グラン・ドーファンには聖職者ボシュエがつけられた。ボシュエ以降王太子の家庭教師には司教以上の聖職者が望ましいとされるに至った。P. Mormiche, *op.cit.*, p. 21-23.

¹³ ルイ13世は1601年9月22日に生まれた。1606年9月14日、5歳の時に洗礼を受けた。1609年3月8日、7歳の時、教育が始まった。そして1610年5月14日に9歳で即位した。ルイ15世は1710年2月15日に生まれ、1712年3月7日、2歳で受洗、1715年9月1日即位した。1717年3月、7歳から教育が始まった。*Ibid.*, p. 185.

て取り止められた。彼女が、社会道徳、政治、論理的思考を学ぶ哲学的なことより、宗教的道徳に力を入れた教育を望んだからである。こうして、マザランは、リシュリユーの創造物と謳われた聖職者、アルドゥアン・ポーモン・ド・ペレフィックスを家庭教師に、副家庭教師にはシャルトルの司教アントワヌ・ゴドーを任命した。ルイ14世の養育係が任命される前のことで、通例とは順序が逆であった。ペレフィックスも、ランブイエ侯爵夫人の末娘ジュリーにささげたマドリガル『ジュリーの花飾り』に参加したゴドーも取り立てて才覚があるわけでもなかった。ルイ13世やアンヌ・ドートリッシュが息子の教育に興味がなかったのではないかと、あえてその痕跡を消したかのようだとい憶測されている¹⁴がそれを裏付けするような家庭教師の選定であった。

フロンドの乱の火種はすでにあちらこちらに散らばり、誰が敵か味方かわからない不穏な情勢のなか、他の貴族たちとの勢力関係を踏まえると、国王ルイ14世の健全な養育環境を作れなかったことは容易に想像がつく。ペレフィックスの教育の欠陥を補う意味を含め¹⁵、ルイ14世の弟フィリップの家庭教師となったラ・モット・ル・ヴァイエが、家庭教師の立場ではないが、ルイ14世の君主としての務めを含めた知識を授けた。ラ・モット・ル・ヴァイエの他、マザランが教育を受け持ったが、ルイ14世の学習期間はフロンドの乱と重なっており、一所に落ち着いて勉強すること

¹⁴ *Ibid.*, p. 159.

¹⁵ ペレフィックスは、自らが執筆した『王太子の教養』*L'Instruction du prince*を使ってフランス語に訳す練習、続いてラテン語に訳しなおす練習をさせることでラテン語とフランス語の練習をさせた。*Ibid.*, p. 58.

¹⁶ このころフランスは揺れ動いていた。リシュリユーとその後を継いだマザランの強行政策はフランス国内のあらゆるところで不満を煽っていた。国内においては、一国一宗派としてプロテスタントを弾圧、法服貴族を重要視し帯剣貴族を牽制、地方統治における国王の罷免権などを謳い、対外的には30年戦争に参戦した。これにより国家支出は4倍に膨れ上がり、増税による課税額の拡大は民衆の反感を煽った。社会の変化、弊害が臨界点に達し爆発したのが、「投石遊び」という意味を持つフロンドの乱である。第一次フロンドともいべき高等法院のフロンドが1648年に起こり、和解が成立するや第二の親王のフロンドが、続いてコンデ親王のフロンドが立て続けに起こり、終息したのは1652年である。ルイ14世10歳から14歳のことである。パリを包囲した反乱軍が押し寄せ、ルーヴル宮殿にいたルイ14世はマザランとともにサン＝ジェルマン＝アン＝レーへ避難せざるを得なくなった。

は難しかった。マザランはこの間幼いルイ14世の教育に関するいかなる執筆も残していない¹⁶が、マザランが尽力したことは間違いない。後のルイ14世の活躍をみれば、この不規則な教育環境が、反対にルイ14世に臨機応変に対応する術を得ることを余儀なくしたことが分かる¹⁷。

H.デュリュオンは、国王には、長い間芸術や古典の知識が欠けていたとも指摘している¹⁸。けれども、ルイ14世自身、ヴァイオリンを奏で、13歳の時から太陽王に扮して踊っていたことを考えると、実際の国王の知識のレベルを判断することは難しい。いずれにしてもデュリュオンが言及するように、息子の誕生によって、国王ルイ14世が青少年期に学ぶべき知識の不足を埋めようという気になった¹⁹とすれば、息子グラン・ドーファンのための『古典ラテン文集』編集プロジェクトを後押ししたプラスの要因といえよう。

3. プロジェクト実現のための第二要素：グラン・ドーファンの教育

グラン・ドーファンの養育係には文武に秀でたモンソーエ侯爵が選ばれた。プロテスタントであったが改宗し、1645年、足しげく通っていたサロンの女主人、ランブイエ侯爵夫人の娘ジュリー・ダンジェンヌと結婚した。このモンソーエ侯爵夫人が1661年から1664年までグラン・ドーファンのお世話係を務めた。彼女の手を離れ、1668年、グラン・ドーファンが7歳になったとき、モンソーエ侯爵が養育係になった。侯爵は「オネットム²⁰」と呼ばれるにふさわしい、優れた軍人であり、

¹⁷ ルイ14世の教育のために書かれた「王太子の教育」論は、出版されたか否かは別として、数多く存在する。例えば、ピエール・メナールの『王子たちのアカデミー』Pierre Ménard, *L'Académie des princes, où les rois apprennent l'art de régner de la bouche des rois, ouvrage tiré de l'histoire tant ancienne que nouvelle, dédié à Mazarin*, Cramoisy, Paris, 1644、ラ・モット・ル・ヴァイエの『王太子の教育について』La Mothe Le Vayer François de, *De l'Instruction de Monseigneur le Dauphin à Monseigneur l'Éminentissime cardinal duc de Richelieu*, Paris, Cramoisy, 1640、ペレフィックスの『王太子の教育』H. B. de Péréfixe, *Institution d'un prince, institutio principis ad Ludovicus XIV*, 1647, Paris, Antoine Vitre があある。P. Mormiche, *op. cit.*, p. 44-61.

¹⁸ H. Druon, *op. cit.*, p. 137 et sq.

¹⁹ *Ibid.*, p. 137 et sq.

忠実で徳が高く、さらに社交界に通じていた²¹。アカデミー・フランセーズは、彼ほど養育係にふさわしい人物はいないとして、国王のこの采配を称賛したと言われている²²。王太子の養育係に文武に長けた人物が求められるようになったのは、モントーリエ侯爵に端を発する²³。モントーリエ侯爵は、家庭教師には宗教教育とともに文学を教えることのできる人材が必要であると考え、司教であったボシユエを、副家庭教師には、1662年から親交があったピエール＝ダニエル・ユエを起用した。ユエはヨーロッパ屈指の文学貴公子と呼ばれるほどの知識人であった²⁴。

養育係、家庭教師の熱心な教育のおかげで、13歳になったグラン・ドーファンはかなり流暢にラテン語を操れるようになっていた。モントーリエ侯爵は貴族の子弟が13歳で教育を終えることに異論はなかったが、グラン・ドーファンが学問を学ぶことを中止することには反対し、様々な人と議論する機会を設け、父である国王とも政治について議論を戦わせるべきだと主張した。古代から脈々と続く歴史、フランスの歴史を知ること、そして古代の遺産である文化の造形を深め、民衆の意思や上に立つ者の義務を知することは、将来フランスを担う者が知る務めであるからだ。そしてラテン語を含めた教養を学ぶために、モントーリエ侯爵はユエとともに、グラン・ドーファンのための『古典ラテン文集』を企画した。第一作目ができたのは1674年で、グラン・ドーファン14歳のことであった。モントーリエ侯爵が、王太子が13歳以上になっても、教育を続けさせたいと国王に進言したのも頷ける。

²⁰ 「オネットム」 *honnête homme* とは「17世紀の理想的な人物像で、宮廷人として、あるいは社交界の人間としての理想的な在り方。(略) 社交的に優れていることに加え、徳の高い内面性、洗練された会話や文章、立派な立ち振る舞いが求められるようになった。」オディール・デュスッド、伊藤洋監修『フランス17世紀演劇事典』中央公論新社、2011年、p. 587

²¹ P. Mormiche, *op. cit.*, p. 64-67. モントーリエ侯爵は同時代の人からも公正ではあるが厳格であると知られていた。子供の教育において、課題をきちんとこなすなど、義務は果たすものであるとし、それを守らない場合は体罰も辞さないという信念を持っていた。C. Volpilhac-Augier, *op. cit.*, p. 32.

²² P. Mormiche, *op. cit.*, p. 68.

²² *Ibid.*, p. 68.

²³ C. Volpilhac-Augier, *op. cit.*, p. 35.

²⁴ Pierre-Daniel Huet, *Huetiana* (1630-1721), Paris, J. Estienne, 1722, p. 92. Cité par C. Volpilhac-Augier, *op. cit.*, p. 35.

このプロジェクトはモンソーエ侯爵が養育係に選ばれたときから構想されていたのだが、その裏には彼自身、苦い思い出があった。モンソーエ侯爵はランブイエ侯爵夫人のサロンに出入りし、ルイ14世の家庭教師アントワヌ・ゴドーらとともに後に妻となるジュリーにささげるマドリガル『ジュリーの花飾り』に参加するなど文才に恵まれていた。『王太子のための古典ラテン文集』でも1679年12月まで、制作に携わっていた。けれども、ユエによると、彼は子供のころから、古典ラテン作家の作品をととても丁寧に読んでいたが、二つの障害に途中で中断を余儀なくされた²⁵。その障害とは、原文の言葉や文体の難解さによる理解不足と、もう一つは古典に関する知識不足であった。そこで、彼はグラン・ドーファンが同じ悔しさを覚えないで済むように、難しいところは平易なラテン語に直したものを付与し、言葉や、作品を理解するのに必要な事項の解説も盛り込んだ『古典ラテン文集』を作ることを決心したのである。

1539年のヴィレル＝コトレ勅令でフランス語が公用語として用いられ、フランス語の有用性が認められ、フランス語の能力が必要となってきた時代である。学校教育ではラテン語からフランス語に公用語が変わりつつあった。それでも知識の源である古典ラテン作家のラテン語による著作集を創ることは受け入れられた。ランブイエ侯爵夫人を始め、スキュデリー嬢、ニノンのサロンなどご婦人方のサロンが流行し、そこでは男女が思想・哲学・文学、社会道徳を語り合っていた。知識人たちはラテン語の素養があり、文学・文芸、学殖に恵まれた時代であったからだ。フランス国内において絶対君主制を確立させたルイ14世は、対外的には精力的に戦争を起し、領土拡大を確実に推し進めた政治的才覚を披露していた。そのような国王、ひいてはフランスにとって、国が王太子の教育に力を入れ、学術的な側面を重視していることは対外政策としても意味があることであった。

II. 『王太子のための古典ラテン文集』とラテン語教育

1. プロジェクト実現を可能にした第一の原動力

モンソーエ侯爵にとってこのプロジェクトを始動させた原動力は教育環境において二つある。その一つは、知識の宝庫である古典ラテン作家の作品が物理的に身近にないということであった。

理由として挙げられるのは、印刷術により多くの本が出版されるようになったと

しても、やはり書物は安価なものではないということである。次に、学校教育の場では青少年の精神的成長に伴う様々な制約から、すべての本がアクセス可能だったわけではないという現状である。そこでコレクションに選ばれた古典ラテン作家の作品は、学校教育において学習すべき作家として取り上げられていないものも含めたのだ。青少年の目にはふさわしくないという作家や作品は幾つもあったが、『王太子のための古典ラテン文集』に入っていて驚愕する作家は、序文にも記したが、やはりプラウトゥスとテレンティウスといえる。それを裏付けるのが、イエズス会のコレージュの選択である。学習すべき作家の中からプラウトゥスとテレンティウスの扱いについて悩み、削除するに及んだ一連の流れのなかに彼らの評価を見ることが出来る。

イエズス会士は文末に載せた資料からもわかるように、『王太子のためのコレクション』の編集に多くかかわっている。39著作のうち13作品がイエズス会士によって作られた。彼らの博学は有名であり、モントーゼ侯爵とユエが彼らに白羽の矢を立てたことは頷ける。ところが彼らの知識と学校教育とは別物で、コレージュでは、子供たちの教育において有用な作品が学習すべき作家として選定されていた。イエズス会のコレージュでは、会創設者のイグナチオ・デ・ロヨラによって1559年に定められた『学事規定』*Ratio studiorum*に基づいた教育がなされていた。『学事規定』によると、学ぶべき作家は第一にキケロである。次にウェルギリウス、ホラティウス、カエサル、サルスティウス、コルネリウス・ネポス、ティトゥス・リウィウス、そして哲学者セネカや、大プリニウス、クインティリアヌス、タキトゥス、小プリニウスと続く²⁶。先人たちの作品を学ぶことは、人格形成時の子供たちにとって大切なことであるからだ。そしてコレージュでは基本的にラテン語が話され、子供たちはラテン語を話し、書くことを学んだ²⁷。

けれども、「生きたラテン語の日常会話の師」と評されていた古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスは学習すべきリストからは削除されていた。プラ

²⁶ G. Dupon-Ferrier, *Du Collège de Clermont au Lycée Louis-Le-Grand (1563-1920)*, Paris, E. de Boccard, 1921, tome 1 : *Le Collège sous les Jésuites*, 1563-1762, tome 2 : *Le Collège et la Révolution*, 1763-1799, p. 133.

²⁷ F. Charmot, *La Pédagogie des Jésuites, Ses principes—Son actualité*, Paris, Edition Spes, 1943, p. 248.

ウトゥスはその内容ゆえに最初から削除することは決まっていたが、テレンティウスについてはかなり悩んでいたことが知られている。イグナチオ・デ・ロヨラは、ホラティウス、マルティアリス、特にテレンティウスの重要性に鑑み、1548年、『学事規定』を制定する前、フルシウス神父に教育上好ましくない部分を削除した版を作るよう依頼していた。ところが、なかなかイグナチオの納得いくものが出来なかったこと、切り貼りしたものになると本来の原典の良さが損なわれてしまうなどの理由から、完全に削除することを決定した²⁸。ナダル神父はテレンティウスの『自虐者』などは削除する箇所もない、道徳的にも問題ない作品であると、かなり強く推した²⁹が、テレンティウスがイエズス会のコレージュで学習すべき作家リストに載ることはなかった。

この重要作家の欠如という点において、モントージエ侯爵が、『王太子のための古典ラテン文集』編集プロジェクトとして、プラウトゥスとテレンティウスを早い段階で手掛けた理由の一つといえよう。

2. プロジェクト実現を可能にした第二の原動力

第二の原動力は、この時代の教育機関では、主にラテン語ではなく母国語であるフランス語の習得を第一に目指していたという点である。イエズス会のコレージュではラテン語が使われていたが、母国語であるフランス語をまず学習するべきだというのがポール＝ロワイヤルの考え方であった。斬新な試みであったが、彼らは「ラテン語やギリシャ語を10～12歳で学ぶとしたら、フランス語を学ぶのは30歳を超えてしまう³⁰」と考え、子供たちが、母国語であるフランス語を学び、正しくまた、自然なフランス語を使えるようになることを重要視した。

ポール＝ロワイヤルの隠士たちは自らラテン語の作品の対訳のテキストを作っ

²⁸ 執筆者博士論文 *Plaute et Térence en France aux XVI^e et XVII^e siècles*, sous la dir. de G. Forestier, 2011, p. 113-116.

²⁹ *Sisema y ordenamiento de estudios à Rome en 1586*, p. 385-386; Dr. Miguel Bertrán-Quera. S. J.: *La pedagogía de los jesuitas en Ratio studiorum: La fundación de colegios. Orígenes, autores y evolución religiosa, caracterológica e intelectual*, San Cristóbal-Caracas, 1984, p. 32 et p. 204-205.

³⁰ Le Maistre de Sacy, *Au Lecteur des Comédies de Térence*, éd. cit.

た。「フランス語の訳を何度も読ませ、必要とあればテキストを暗記³¹」させた。そしてラテン語、フランス語の双方の文法をしっかりと習得し、ラテン語からフランス語、フランス語からラテン語の両方向に訳すことを訓練した。ラテン語をフランス語に訳すときは「訳している対象の作家が何を言いたいのかをよく理解したうえで、もし彼らがフランス語で書いたならそうするであろう³²」フランス語にすることを教えた。

『王太子のための古典ラテン文集』プロジェクトが始動した頃は、ラテン語で読み書きができることはフランス語で読み書きができるようになる基礎である、というモンテーニュの『エッセー』に代表される考え方は薄れてしまっていた。伝統的にイエズス会のコレージュでラテン語が日常言語として使われている他は、ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」を始め、オラトリオ会の学校でもフランス語が用いられ、ラテン語の学習は下火となっていた。『王太子のための古典ラテン文集』完成の約30年後、1762年にイエズス会が追放されると、学校教育におけるラテン語の地位はますます縮小していく。サント・ブーヴがルイ14世の世紀の特徴として「ラテン語をフランス語で話すことをやめた³³」時代と言っているが、母国語であるフランス語の理解と適切な用法が重視されるようになった。このプロジェクト始動時は、今まで権威のあったラテン語はその地位をフランス語へシフトしていった過渡期であったのだ。

時同じくしてミシェル・マロールが1650年から1680年にかけて、驚異のスピードで古典ラテン作家の作品をフランス語に訳し、対訳版を次々に発表した。タヌギー・ルフェーヴル、アンドレ・ダシエ、ダシエ夫人³⁴と並び、古典作家のフランス語訳が揃い始めた頃でもある。翻訳は、1540年に翻訳論³⁵が出されてから幾度と

³¹ 拙論『人文学報』2014, p. 238.

³² *Ibid.*, p. 238. Voir aussi F. Delforge, *op. cit.*, p. 300. アントワーズ＝ルメートルの目指す「キケロがフランス語を話すとしたら、そう話すだろうようなフランス語」習得法である。Antoine le Maître, *les Règles de traduction*, Règle I, cité par F. Delforge, *op. cit.*, p. 301.

³³ Sainte-Beuve, *Port-Royal*, Paris, R. Laffont, coll. Bouquins, 2004, p. 820-821.

³⁴ アンドレ・ダシエはルフィウス・フェストゥスを、ダシエ夫人はアンヌ・ルフェーヴルの名で、フロリュス、ディクティとダレス、アウレリウス・ヴィクター、エウトロピウスを担当した。

なく論争を呼んだが、翻訳者たちはそれでも試行錯誤のうちにフランス語に訳してきた。ポール＝ロワイヤルでは、隠士たちがそれぞれ教育ポリシーのもとに子供たちのため、原典に忠実で美しいフランス語での訳を試み対訳版を作っていた。

フランス語を的確に使えるようになることは重要なことである。けれども、ラテン語の作品はやはり書かれたラテン語で読むほうが味わい深いというのがモンソージエ侯爵の考えであった。また、ラテン語の確かな知識とラテン文学がもたらす知識は、一国の主として、フランスを統治する未来の国王が、知らなければならない教養である。そして時代の流れに逆行するがごとく、古典作家のラテン語による解説付きの、ラテン語のみの著作集にこだわった。

3. プロジェクト実現を可能にするための課題

古典ラテン作家の作品を提供したいという想いと同時に、モンソージエ侯爵にも若い王太子の道德教育のことは念頭にあった。ラテン語にするかフランス語にするか、どの作家を選び、削除するかという点において相違があっても、優れた古典作家の作品が、いつでも手に取れる環境にしたいという思い、道德・倫理教育についての理念はどこかの教育機関においても変わりなかった。ポール＝ロワイヤルの隠士たちの理念と同様、「古典ラテン作家の作品を実際に読むことによって（文学と文化の知識を）深めることになる³⁶」にある。

イエズス会のコレージュにおいて古典作家は次のように学んでいた。

選別された作家について、生まれた時代、著作、文体などの3～12行にまとめられた説明を付したものが準備された。教師たちは、古典作家たちの思想を、テキストを読みながら解説し、生徒たちは、ラテン語のテキストを写し、暗記した。しかし、知識を丸暗記することは知識を習得したことにはならない。そこで教師たちは生徒たちが自由に知識欲を満たすことができるように、図書室には多くの作品集を準備した³⁷。

³⁵ Estienne Dolet, *La manière de bien traduire d'une langue en aultre*, Lyon, Dolet, 1540. 17世紀までの翻訳論の葛藤の歴史については執筆者博士論文、p. 15-103参照。

³⁶ F. Delforge, *Les Petites Écoles de Port-Royal*, 1637-1660, Paris, Cerf, 1985, p. 300.

したがって、生徒たちの自由意志と知識欲を妨げないように、学ぶべき作家は厳選される必要があったのである。テレンティウスのように、一部の作品のみ許容されるという事は後々混乱を招く可能性がある。だからこそ、すべて削除せざるを得なかったのだ。

一方、ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」でも、教室で学んだ作家の作品の中から一冊読むことを推奨していた。ただし、子供たちの道徳・倫理教育のため、彼らの時代の道徳に合わない事柄に、子供たちがショックを受けないよう、古典作家の抜粋をしたり、不穏当箇所を削除した版を準備した³⁸。その一環でプラウトゥスとテレンティウスが訳されたと考えられるが、アントワーン・アルノーによれば、ウィルギリウスとホラティウスも全作品読むに値する作品である³⁹。そして、トマ・ギヨはプラウトゥスの『捕虜』の他、キケロとウィルギリウスを翻訳している⁴⁰。

不穏当箇所の削除の仕方であるが、サシ師は原文の中で、子供たちの人間形成や、道徳・倫理に関する面に悪影響を与えないように、好ましくない場面や表現を修正し、必要とあれば削除した。削除することによって話の内容が変わってしまいそうなところは、加筆も厭わなかった。対象の作家の文体を借用して作品全体の調和にも気を使った⁴¹。

『王太子のための古典ラテン文集』の中で不穏当箇所の削除及び変更された作家は、フェードル（1675年）、クラウディウス（1677年）、プラウトゥス（1679年）、ルクレティウス（1680年）、マルティアリス（1680年）、カトゥルスとティブルスとプロペルティウス（1685年）オウィディウス（1686-1689年）、ユウェナリスとペルシウス（1684年）、アブレイウス（1688年）、ホラティウス（1691年）、アウソニウス（1730年）である。配慮に関する規則などはないが、その根底にあったのは「王太子の心の純粹さと平穩を乱さないため」（プラウトゥス）であり、「恋愛に関して

³⁷ 拙論「学校教育と古典ラテン喜劇—17世紀フランスイエズス会とポール＝ロワイヤルの場合—」、『エイコス』第17号、2012、p. 146。Voir F. Charmot, *La Pédagogie des Jésuites: Ses principes—Son actualité*, Paris, Editions Spes, 1943, p. 247.

³⁸ 筆者博士論文、*op. cit.*, p. 144、拙論『人文学報』*op. cit.*, p. 239.

³⁹ 拙論『人文学報』*op. cit.*, p. 144.

⁴⁰ Sainte-Beuve, *Port-Royal*, *op. cit.*, p. 814-815.

⁴¹ 拙論『人文学報』*op. cit.*, p. 240.

あまりにも夢見がちであるから」(ルクレティウス)である⁴²。

そのため、コレクションの名前 *Ad usum Delphini* という、辞書⁴³には「ルイ14世が王太子のために編纂させた『古典ラテン文集』」という説明とともに、「不穩当箇所を削除した、気の抜けたような」という意味が載せられている。そして皮肉としても使われる熟語として定着してしまった。このコレクション序文の読み手に対する呼びかけには、「王太子」だけでなく、一般の読者にも語りかけられている。王太子の教育のためというのが第一目的であるものの、モントーリエ侯爵が、ラテン語を学び、ラテン文学を紐解きたいという意欲のある者すべてを対象にしていたことがわかる。つまり、この *Ad usum Delphini* という語が蔑視的ニュアンスを持つようになったとはいえ、世間に広まっているという事実は、このコレクションが王室の外にも広がり、モントーリエ侯爵の思いが実ったと解釈できるだろう⁴⁴。

Ⅲ. 『王太子のための古典ラテン文集』とラテン語教育

1. 作家の選別とテレンティウスとプラウトゥスの位置づけ

17世紀の青少年の教育の場でプラウトゥスとテレンティウスを読める環境にあったということは、この時代の礼節、教育を知る者にとってはかなりの衝撃であるに相違ない。このコレクションを再評価したC.ヴォルピラック＝オジェは、プラウトゥスとテレンティウスが、彼らよりも評価を得ている他の作家を差し置いて選ばれていること、プロジェクト始動初期に、他の、例えばキケロやタキトゥスなどよりも先に着手されたことに違和感を覚えたことを言及している⁴⁵。

けれども、イエズス会のコレージュでプラウトゥスとテレンティウスを削除しなければならなかった理由、ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」において、不

⁴² E. Wolff, « La censure », *La collection Ad usum Delphini*, vol. II, sous la dir. de M. Furno, 2005, p.163 et sq.

⁴³ 最初に *Ad usum Delphini* を載せた辞書は『ラルース大辞典』 *Grand Larousse de la langue française* (1971) である。Voir C. Volpilhac-Auger, *op. cit.*, p. 23. 日本でいう「大人の事情」に匹敵する語だが、さらに蔑視的ニュアンスが強い。

⁴⁴ 因みに、フランス国立図書館の研究図書館にある『王太子のための古典ラテン文集』は状態が良いものであれば閲覧可能である。

⁴⁵ C. Volpilhac, *op. cit.*, p. 40.

穏当箇所を削除し多少変えても彼らの作品を教育に使いたかったという事実をみても、この二人の古典ラテン喜劇作家が重要な作家であることは明らかである。1659年、ピエール・ニコルとランスロガ、ポール＝ロワイヤルにおいて『風刺名言集』*Epigrammatum delectus ex omnibus tum veteribus tum recentioribus poetis*を、1669年トマ・ギヨが『格言集』*Fleurs morales et épigrammatiques tant des anciens que des nouveaux Auteurs*を編纂し、その中に、作者以外出典を明らかにしないでプラウトゥスとテレンティウスの格言を数多く取り入れたことが、彼らのラテン語としての価値、格言としての道徳的価値を物語っている。トマ・ギヨは『格言集』の献辞の中でグラン・ドーファンに「他者を統治する前に、自身を制御すること」を学んでほしいと書いている。また、読者に宛てた序文には、この『格言集』を、子供たちが精神的に成長し、社会に出た時に恥ずかしくない大人になるための手ほどきとなるよう作ったと書いている。

子供たちの柔軟な心に、この美しい言葉が示す、正しい行いと心の在り方の規律を、しっかり伝えなければならない。良い慣習、正しいラテン語とはいかなるものかすべて見せなければならない。ラテン語をきちんと使いこなし、正しいフランス語を話すことを見せなければならない。そのうえで慎重に物事を考え欲し、行動することを、そして丁寧に話し書くことを見せなければならない⁴⁶。

この6年後にテレンティウスが、さらに4年後プラウトゥスが編纂されたことは必然であったと考えられる。

また、『王太子のための古典ラテン文集』所収の作家はミシェル・マロールがフランス語訳をした作家と同一ではないが、マロールの訳35著作のうち15著作が重なっている⁴⁷。モントーリエ侯爵とユエがマロールの翻訳をどれほど意識していたかは定かではないし、マロールが翻訳した作家や作品の順序がどこまで恣意的なものかわからない。けれども、『王太子のための古典ラテン文集』では、マロール

⁴⁶ « Advis au Lecteur » des *Fleurs morales et épigrammatiques*, Paris, chez la veuve de Claude Thiboust et Pierre Esclassan, 1669.

⁴⁷ 本論 p. 400-402、参考資料参照。

が後で翻訳したもから編集をしているという傾向がみられる。例えばマロールはウィルギリウスを19、21番目に訳しているが、『王太子のための古典ラテン文集』では4番目である。また、マロールが3番目に訳したホラティウスは38番目、11、12番目、14から18番目に7作品集を訳したオウィディウスは38番目に編纂された。その中で『王太子のための古典ラテン文集』が3番目に扱ったテレンティウスをマロールは10番目（1659年）に、13番目に扱ったプラウトゥスを9番目（1658年）にフランス語に訳している。

グラン・ドーファンは1673年、12歳の時にラテン語のテキストを読み始めている。最初の作品の中にテレンティウスの『兄弟』がある。そして『自虐者』を読んでいる⁴⁸。『王太子のための古典ラテン文集』のテレンティウスは1675年に出来ているので、この編集を担当したニコラ・カミュから素訳のようなものをもらって読んだのかもしれない。また、ボシュエの『王太子の教育のための戯曲29選』*XXIX Recueil de pièces pour l'éducation du Dauphin*⁴⁹を使ったのか、モントーリエ侯爵と親交のあったヘインシウスの版（1618年）を使っていたのかもしれない。正確な年代が記されていないので仮説の域を出ないが、ユエが『自虐者』と『宦官』の私訳したノートが残っている⁵⁰。これらのことからグラン・ドーファンがテレンティウスを好み、挑戦していたことを窺い知ることができる。コレクションの初期にテレンティウスが選ばれたのは、これまた必然のことであったといえよう。

『王太子のための古典ラテン文集』プロジェクトが始動したのはグラン・ドーファンが14歳の時である。若い王太子にとって、喜劇作品は、娯楽の要素もあり、楽しみながら学ぶことができただろう。プラウトゥスとテレンティウスの再来と呼ばれたモリエールはすでに亡かった（1673年）が、古典ラテン喜劇作家の息吹を感じさせる『守銭奴』『アンフィトリオン』『スカパンの悪だくみ』などの作品は馴染みのあるものであったはずである。また、『ローマ皇帝の演説集』がこの時期に編集されていることを考慮すると、王太子の成長に合わせて選ばれていると考えられる。

⁴⁸ P. Mormiche, *op. cit.*, p. 303.

⁴⁹ ボシュエの手書きのノート *XXIX Recueil de pièces pour l'éducation du Dauphin* (sl. sd) には「Argument de l'Heautontimorumenos de Térence」が含まれている。Voir, *ibid.*, p. 303.

⁵⁰ Manuscrit de la traduction de l'*Eunuque* et de l'*Heautontimorumenos* par Huet (sl. sd). *Ibid.*, p. 303 et 549.

さて、古典ラテン喜劇作家のうち最初に編集されたのは1675年テレンティウスで現存の6作品が収められている⁵¹。王立印刷所の業者フレデリック・レオナルは、テレンティウスをこのコレクションに入れたのは王太子が好きな作家であるからだと言及している。そしてテレンティウスの作品が素晴らしいのは言うまでもないことで、改めて繰り返す必要もないと続けている。序文には、国王が、息子の教育を大変気にかけており、モントーゼ侯爵に依頼して実現した教育目的を踏まえたコレクションであると、この版の有用性を謳っている⁵²。

次にプラウトゥスが、4年後の1679年に編集された。2巻、全20作品所収している⁵³。印刷業者はテレンティウスを手掛けたフレデリック・レオナルである。細かい注釈が付けられており、例えば『アンフィトルオ』の中では、アンフィトリオンの系図を載せるなどギリシャ神話の素養がなくても、ここで学べるように配慮されている。同様に、単語や熟語についての辞書並みの説明がつけられている。削除された部分に関してはすべてではないが、巻の終わりにまとめられている。

王太子に宛てられた献辞と序文には、プラウトゥスの作品が喜劇作品として価値があるだけでなく、ラテン語と表現の豊かさによって学ぶことが沢山あることが綴られている。削除された箇所、あるいは言葉が難しいのはプラウトゥスのせいではなく、喜劇が持つ宿命であること、登場人物は自分の身分や性格に合った言葉を話さなければならないからで、そこから、市井の人々の暮らしや考えを窺うことがで

⁵¹ 作品の解説はニコラ・カミュがコルベールの依頼によって引き受けた。Le commentaire sur les œuvres de Térence a été fait par E. Giordani, *La collection Ad usum Delphini*, vol. II, *op. cit.*, p. 55 et sq.

⁵² E. ジオルダーニは、ダシエ夫人は、1717年に自身で編集したテレンティウスの版の中で、テレンティウスの作品に付された解説のうち満足するものは未だかつて現れない、今をもってしてもドナトゥスの解説に勝るものはないと言及している。彼女が参照したダシエ夫人による1717年テレンティウス版は1688年に出版されたものの再版と考えられる。執筆者は残念ながら1699年アムステルダムの海賊版、フランス語訳とその解説はスウェーデン語に訳された1699、1708年版のみで、1717年版は見えていないが、初版でダシエ夫人はドナトゥスの注釈のフランス語訳を載せている。Voir 執筆博士論文, *oc. cit.*, p. 93-103. *La collection Ad usum Delphini*, vol. II, *op. cit.*, p. 56.

⁵³ Le commentaire sur les œuvres de Plaute a été fait par M. Scialuga, *La collection Ad usum Delphini*, vol. II, *Ibid.*, p. 169-179.

きるのだと解説し、一般に非難されているプラウトゥスの、時に粗削りで粗野な言葉遣いを擁護している。そして市民の生活や考えを知ることは、一国の主として心得なければならない知識であり、かつてこの喜劇を見たプラウトゥスの同時代の皇帝に限らず、フランスにおいても、上に立つ者が持たなければならない自覚は古今変わらないものであると説いている⁵⁴。またテレンティウスに比べて風当たりの強い作家であることと、常に二人が比較され優劣をつけられていることに言及し、比較など意味のないことであるとしている。プラウトゥスの編集にあたり、プラウトゥスの作品が如何に優れているかを感じ取ったその思いが溢れている⁵⁵。

2. 『王太子のための古典ラテン文集』王太子の反応、家庭教師の反応

王太子がテレンティウスを読んでいたことは、家庭教師ボシュエのユエへの手紙で明らかである。1679年のある木曜日の手紙である。

木曜朝、ヴェルサイユにて [1679年]

(…) 私たちはまず「出エジプト記」を読み、午前中テレンティウスの『宦官』を、そして午後にはフロリュスを読みました。どこまで読んだかは、私の本に印をつけておきましたから、上の引き出しに入れてあるのを見てください。鍵はミレ氏に渡しておきます⁵⁶。

テレンティウスの作品の中でも最も反道徳的な作品をボシュエが王太子に読ませたことにH.デュリュオンはショックを隠せないようであった⁵⁷。ボシュエのように手

⁵⁴ *Ibid.*, p. 172.

⁵⁵ プラウトゥスとテレンティウスのどちらかが優れているかという点に関しては、見る側面によって全く異なる。舞台上に繰り広げられる芝居としての作品と捉えるか、読み物として、文法や表現、筋の展開などテキストに重きを置くか、評価はまるで異なる。これに関しては、執筆者博士論文、*op.cit.*, 拙論『人文学報』、2014、『混沌と秩序—フランス十七世紀の諸相—』、中央大学人文科学研究所編共著、中央大学人文科学研究所研究叢書60号、2013等参照。

⁵⁶ Bossuet, *Lettre 192*, *op. cit.*, p. 108.

⁵⁷ H. Druon, *op. cit.*, p. 262-263.

厳しい反演劇論を展開する人物の言葉とは思えないというのである。事実、ボシユエはカファロ神父宛の手紙の中で、モリエールの喜劇を標的にした演劇論を送り、カファロ神父は、モリエールだけではなく、ラシーヌもコルネイユも、いかなる演劇も道徳・倫理に反していると賛同した返事を書いている⁵⁸。1694年、ボシユエの『格言、あるいは演劇に関する考察』*Maximes et réflexions sur la Comédie*の中には、「イタリア人の喜劇の中には娼婦があふれていたが、今日、モリエールの芝居にもかなりあくどいシーンがあり、演劇はその存在からして、善良なるキリスト教徒を墮落させている⁵⁹」という反演劇論を読むことができる。ピエール・ニコルも『演劇論』*Traité de la Comédie*の中で、たとえ演劇の本質がそうでなかったとしても、舞台上の疑似的な空間は生身の身体による目に見える効果と、表現された言葉の力と、二つが合わさることで五感に働き、情念を呼び起こすとして、ポール＝ロワイヤルでは観劇を禁止していた。

けれども、イエズス会、ポール＝ロワイヤル双方の教育者が、プラウトゥスとテレンティウスの扱いについて悩んでいたことを思い浮かべるなら、彼らが逆に、プラウトゥスとテレンティウスに肯定的なことを書いていてもそれほど驚くことはないかもしれない。ボシユエはまた、教皇へ次のような手紙を送っている。

王太子は、作品を通して、描かれている風俗や、年齢に応じて異なる登場人物の性格、様々な感情を感じ取っていました。それぞれの登場人物が（身分や年齢、性格見合う）自然な振る舞いをしているからです。だからこそ、このような作品にも礼節があると言えるのです⁶⁰。

ニコルは1670年に執筆した『王太子の教育について』*De l'éducation d'un prince*のなかで、テレンティウスを次のように評価している。

⁵⁸ Bossuet, *Lettre au P. Caffaro, Correspondance IV (octobre 1693-décembre 1694)*, éd. cit., p. 259, et p. 266-267, et *Lettre du P. Caffaro à Bossuet, ibid.*, p. 291-292.

⁵⁹ Bossue, *Maximes et réflexions sur la Comédie*, Paris, J. Anisson, 1694, p. 18-20.

⁶⁰ Bossuet, *op. cit.*, p. 146-147.

雄弁術の美しさには二種類あり、子供たちはよく意識しておかなければならない。一つは美しく堅固な思想から成り立っている。けれども、それらは時として意外な、びっくりするようなことを言っていることもある。ルクレティウスとセネカ、タキトゥスの文はこの種の美しさで溢れている。もう一つは大して珍しいことは言わない。けれども、自然で、平易な言葉で、上品さと繊細さを持ち合わせている。聞いている者の神経を逆なでることなく、皆がよく知る譬えを使う。かといって、決してつまらないものではなく、生き生きとして耳に心地よい。そして時流に逆らわず、聞き手の知識の届く範囲で、あらゆる感情や実際に身近に起こりうることを話す。この種の美しさを持ち合わせているのがテレンティウスであり、ウィルギリウスなのだ。⁶¹

まさに喜劇が具現していることではないか。喜劇の定義は現実の写し絵で、観客を愉しませながら教諭するものである。ホラティウスが言うように、芝居の中で登場人物は年齢、身分、性格など、与えられた然るべき設定の中で動かなければならない。ルキウス・リウィウス・アンドロニクスが言うように「人生の鏡である」芝居は「庶民の生活の中に入り込」み、「それぞれの立場や状態において礼節を守らなければならない」のだ⁶²。観客に疑似体験を実感させる演劇の側面は、道徳・倫理観を学んでいる最中の青少年にとって諸刃の剣になる。だからこそボシュエもニコルも演劇に反論を唱えていたのだ。しかし裏を返せば、ニコルが『王太子の教育について』の中で指摘しているような、テレンティウスの演劇において見いだされる、人を魅了する独特の要素なのである。テレンティウスの作品の中には、グラン・ドーファンが学ぶべき社会の風習、庶民の世界が映し出されている。同時に上に立つ者が持つべき「技」が隠されているということなのだ。それこそが、彼らが、王太子の教育においてテレンティウスを容認している点である。

結論

17世紀においてプラウトゥスとテレンティウスの存在は実に面白い。彼らは通常

⁶¹ Pierre Nicole, *De l'éducation d'un prince*, Paris, Libraire Juré, 1670, p. 63-64.

⁶² Peletier du Mans, *Art Poétique*, Paris, M. Vascosan, 1545.

「喜劇の父」であり「ラテン語日常会話の師」と紹介される。そして常に二人セットで扱われ、比較され優劣をつけられる。これは古来変わらない。優劣の判断は作品を舞台上の芝居を考えた場合、筋と役者の台詞と動きが伴って生み出された世界観が論点となる。作品を詩と捉え読み物として考えた場合、文体や表現という言葉の持つ世界観が論点となる。また、受け手の時代の風習や道德観によって作品の世界観が論点になる。どこに焦点を当てるかで、これほどまでに受容が変わる作家も多くはないだろう⁶³。多少の時代錯誤があっても、登場人物の名前やちょっとした細部を変えれば、彼らの作品はどの時代、どの社会においても受け入れられる、人間の本質を問題にしている。だからこそ、彼らの評価は玉虫色に変わり、教育に携わる人々を悩ませてきたのだろう。

すべての人を包括できる度量が求められる未来の国王の教育のための『古典ラテン文集』プロジェクトは、あるいは自分の所属する立場が枷となって悩んでいた人々たちを解放させたのではないだろうか。P.モルニッシュは「グラン・ドーファンの『学事規定』はイエズス会のコレージュやオラトリオ会のそれより規制が甘いようだ。またポール＝ロワイヤルの学習法に類似している⁶⁴」と言及しているが、そこにはイエズス会も、ポール＝ロワイヤルもプロテスタントもない。『王太子のための古典ラテン文集』は純粹に学問を愛する人々によって作られたコレクションである。モンソーエ侯爵は自分がラテン文学を勉強していた時、悔しい思い出があった。また宮廷における貴族たちや戦場で出会った異なる階級の人々との会話や習慣から現状を知ったことだろう。そして妻ジュリーと義母ランブイエ侯爵夫人のサロンに出入りすることによって華々しい文壇の風を感じていただろう。それぞれの世界には互いに相入れることのできない目に見えない境界線がある。それと同じような感覚を、モンソーエ侯爵は教育現場に感じたのだ。そして開かれているはずの知識の入口が半分閉じられているのを見て、「王太子のため」という名目で取り扱ったのではないだろうか。ポール＝ロワイヤルとイエズス会に近いモンソーエ侯爵、ボシュエ、ユエがグラン・ドーファンの養育係と家庭教師だったのだから、

⁶³ 拙論 « Molière, successeur de Plaute et Térence », *Études de Langue et Littérature Françaises*, 第102号, 2013, p. 19-34参照。

⁶⁴ P. Mormiche, *op. cit.*, p. 305.

王太子の教育が、すべてを融合した形式であったとしてもおかしくはない。

ブラウトゥスとテレンティウスは、ある意味どこにも属し得ないといえるが、彼ら作品の受容を『王太子のための古典ラテン文集』から見ることで、様々な規則に縛られつつも、未来のフランスを見据えて前進していく17世紀の社会一断面が浮かび上がったのではないかと思う。

『王太子のための古典ラテン文集』所収作家リスト⁶⁵

N°.	pub	Auteur	Éditeur	Date d'achève d'imprimer	Période des auteurs latins	N° de travail de Marolles (pub)
(i)	1673	Danet, <i>Dictionarium novum latinum et gallicum</i>		1 ^{er} mars 1673	Philologue du XVII ^e siècle	
1	1674	Florus	Anne Le Fèvre*	20 septembre 1674	Siècle des Antonins	
2	1674	Salluste	Daniel Crespin	6 novembre 1674	Avant Auguste	
3	1675	Térence*	Nicolas Camus	27 septembre 1675	Avant Auguste	10 1659
4	1675	Virgile*	Charles de la Rue, S. J.	30 octobre 1675	Avènement d'Auguste	19, 21 1662, 1666
5	1675	Cornelius Nepos	Nicolas Courtin	28 novembre 1675	Avant Auguste	
6	1675	Phèdre	Pierre Danet	3 décembre 1675	Avènement d'Auguste	
7	1675	Velleius Paterculus	Robert Giguez, S. J.	? ; privilège registré le 16 novembre 1675	Avènement d'Auguste	
8	1676	Panégryriques anciens	Jacques de la Baune, S. J.	23 novembre 1676	Début du IV ^e siècle	
9	1677	Justin	Pierre Joseph Cantel, S. J.	15 octobre 1676	Siècle des Antonins	
10	1677	Claudien	Guillaume Pyrrhon	24 mars 1677	Début du IV ^e siècle	
(ii)	1677	Danet, <i>Radices seu dictionarium linguae latine</i>		1 ^{er} août 1677	Philologue du XVII ^e siècle	
11	1678	Quinte-Curce	Michel le Tellier, S. J.	27 septembre 1677	Avènement d'Auguste	
12	1678	César	Jean Goduin	12 février, 1678	Avant Auguste	

⁶⁵ 左カッコ付きローマ数字はピエール・ダネによる羅仏辞典6版。カッコ付きの算用数字は改訂版。古典ラテン作家太字*付はマロールが翻訳してあるもの。右にマロールが翻訳した順、出版年を記載。編集者太字はイエズス会士。編集者*付はアンドレ・ダシエとダシエ夫人。[La collection *Ad usum Delphin, op.cit.*より執筆者が作成。]

13	1679	Plaute*	Jacques de l'Œuvre (2 volumes)	31 décembre 1678	Avant Auguste	9 1658
14	1679	Manilius	Michel Dufay et P. D. Huet	24 mars 1679	Avènement d'Auguste	
15	1679	Valère Maxime	P. J. Cantel, S. J.	20 septembre 1679	Avant Auguste	
(iii)	1680	Danet, <i>Dictionarium novum latinum et gallicum</i>			Philologue du XVII ^e siècle	
16	1680	Boèce	Pierre Cally	8 janvier 1680	VI ^e siècle	
17	1680	Lucrèce	Michel Dufay	25 mai 1680	Avant Auguste	
18	1680	Martial*	Vincent Colesson	8 juin 1680	Avènement d'Auguste	7 1655
19	1680	Dicty de Crète et Darès de Phygie	Anne Le Fèvre*	Privilège registré le 28 juin 1680	Début du IV ^e siècle	
20	1681	Aulu-Gelle	Jacques Proust, S. J.	19 juillet 1681	Siècle des Antonins	
21	1681	Festus	André Dacier*	30 juillet 1681	Début du IV ^e siècle	
22	1681	Aurelius Victor	Anne Le Fèvre*	31 juillet 1681	Début du IV ^e siècle	
23	1682 (date fictive : 1679?)	Tite-Live	Jean Doujat (6 volumes)	1 ^{er} septembre 1682 pour le dernier volume	Avènement d'Auguste	
24	1682	Tacite	Julien Pichon (4 volumes)	4 octobre pour le dernier volume	Siècle des Antonins	
25	1683	Eutrope	Anne Le Fèvre*	31 décembre 1682	Début du IV ^e siècle	
(iv)	1683	Danet, <i>Nouveau Dictionnaire françois et latin</i>		6 décembre 1683	Philologue du XVII ^e siècle	
26	1684	Suétone	Auguste Babelon	15 mars 1684	Siècle des Antonins	
27	1684	Cicéron, <i>Orationes</i>	Charles Hallot de Mérouville, S. J. (3 volumes)	10 mai 1684	Avant Auguste	
28	1684	Juvénal et Perse*	Louis Desprez	6 juin 1684	Siècle des Antonins	5 1653
29	1685	Pline l'Ancien	Jean Hardouin, S. J. (5 volumes)	2 mai 1684; donc antérieur aux deux précédents	Avènement d'Auguste	

30	1685	Stace*	Claude Berauld (2 volumes)	20 mars 1685	Avènement d'Auguste	3 1652
31	1685	Catulle, Tibulle, Properce	Philippe Dubois (2 volumes)	6 avril 1685	Avant Auguste	
32	1685	Cicéron, <i>Epistolae ad Familiares</i>	Philibert Quartier, S. J.	4 octobre 1685	Avant Auguste	
33	1687	Prudence	Étienne Chamillard, S. J.	Toutes les dates laissées en blanc sur les exemplaires; approbation du provincial Pallu, du 22 octobre 1686	Début du IV ^e siècle	
34	1687	Cicéron, <i>Omnes qui ad artem oratoriam pertinent</i>	Jacques Proust, S. J. (2 volumes)	Non mentionné	Avant Auguste	
35	1688	Apulée	Jules Fleury (2 volumes)	23 juin 1688	Siècle des Antonins	
36	1689	Cicéron, <i>Opera Philosophica</i>	François LHonoré, S. J.	Non mentionné	Avant Auguste	
37	1689	Ovide*	D. Crespin, Lyon (4 volumes)	Non mentionné	Avènement d'Auguste	11, 12, 14-18 1660, 1661
(v)	1691	Danet, <i>Magnum dictionarium latinum et gallicum</i>		25 janvier 1691	Philologue du XVII ^e siècle	
38	1691	Horace*	L. Desprez (2 volumes)	30 juin 1691	Avènement d'Auguste	3 1652
(vi)	1698	Danet, <i>Dictionarium antiquitatum romanarum et graecarum</i>		10 janvier 1691	Philologue du XVII ^e siècle	
(39)	1699	Virgile	Charles de la Rue, S. J. (3 volumes, in-12)	14 avril 1699	Avènement d'Auguste	
(40)	1723	Pline l'Ancien	J. Hardouin, S. J. (in-folio, 3 volumes)	Approbation du provincial le 22 avril 1719	Avènement d'Auguste	
41	1730	Ausone	J. Fleury et Jean-Baptiste Souhay	Privilège registré le 14 juin 1729	Début du IV ^e siècle	